大学生を対象とした「新型うつ」の しろうと理論の検討^{1,2}

勝谷 紀子³ 青山学院大学 岡 隆 坂本 真士 日本大学

Lay theories of “modern-type” depression among undergraduate students

Noriko Katsuya (Aoyama Gakuin University), Takashi Oka, and Shinji Sakamoto (Nihon University)

This study examined the lay theory characteristics of “modern-type” depression using a text mining method. A total of 225 undergraduate students filled in a questionnaire. They answered questions about the characteristics and causes of as well as reasons for “modern-type” depression using free-form text entry. Then, they answered questions about their sources of information on “modern-type” depression. The results showed that participants mainly described that “modern-type” depression is common among young people and that people with “modern-type” depression lack awareness of the illness. Also, participants indicated that they obtained knowledge about “modern-type” depression from different information sources such as television and the internet.

Key words: lay theory, “modern-type” depression, text mining.

The Japanese Journal of Psychology

2018, Vol. 89, No. 3, pp. 316–322

J-STAGE Advanced published date: July 14, 2018, doi.org/10.4992/jjpsy.89.17311

最近、新たなタイプの抑うつが存在することが指摘されており、「新型うつ」の名称で知られている。「新型うつ（病）」⁴は、雑誌、テレビ、インターネット等を通じ、従来型抑うつとは異なるタイプの抑うつとして紹介されるようになった。たとえば、2012年の「週刊文春」では5週にわたり「新型うつ」に関する特集を組んでいる。「新型うつ」を特集した雑誌記事の説明をみると、「新型うつ」の特徴として、若い人に多い、他罰傾向、職場では抑うつになるが遊

びには行ける、等の特徴があげられている。そして、これらは従来型抑うつの特徴（例：中高年に多い、自責的、配慮的で几帳面）とは異なるとされている。たとえば、同年発行の“AERA”では、うつ病の診断書を提出した長期休暇中の社員が、オンラインゲームを行っていたり、サーフィンの大会に出場したりした、というケースが報告され、従来型抑うつ of の社員から予測される行動とは大きく異なることを報じている（鳥沢, 2012）。

このように「新型うつ」に関する報道は現実に存在するものの（勝谷・坂本, 2015）, 「新型うつ」という疾患名や診断名は、医学的には存在していない。実際、日本うつ病学会のサイトには、「『新型うつ病』という専門用語はありません。むしろ精神医学的に厳密な定義はなく、そもそもその概念すら学術誌や学会等で検討されたものではありません」とある（日本うつ病学会, 2012）。「新型うつ」は、従来型抑うつとは異なる特徴を持つ一群の症候群であり、さまざまな精神科医が提案した名称（例：現代型うつ病、ディスチミア親和型うつ病、未熟型うつ病）を包括する概念だと専門家の間では認識されているようである（坂本・村中・

Correspondence concerning this article should be sent to: Noriko Katsuya, Aoyama Gakuin University, Fuchinobe, Chuo-ku, Sagami-hara 252-5258, Japan. (E-mail: katsuya_noriko@nifty.com)

¹ 本研究のデータの一部分は、日本心理学会第77回大会（2013）、日本社会心理学会第54回大会（2013）で発表された。

² 本研究は JSPS 科研費 25380854 の助成を受けたものである。

³ 調査実施にあたっては日本大学大学院の山川 樹さん、データ整理には日本大学大学院の山本 真菜さんと川久保 美奈さん（所属は当時）にご協力いただきました。記して深くお礼を申し上げます。

⁴ 新聞や雑誌の記事書籍を見ると、「新型うつ」と「新型うつ病」の2種類の表記がみられる。それぞれ明確な区別がされていないため、両者を同じ意味として扱う。

山川, 2014)。なお, 操作的診断基準のDSM-5 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fifth Edition; American Psychiatric Association, 2013) における「非定型の特徴を伴う抑うつ症候群」(非定型うつ病) も, 「新型うつ病」に含めることがあり得る同サイトで指摘されている。

以上, 「新型うつ」はコンセンサスのある定義が存在しないにもかかわらず, 「新型うつ (病)」の情報がメディアで伝えられ, 広く知られている現状がある。「新型うつ」については, 専門家においても多様な意見があり, 見解がまだ統一されていない。それにもかかわらず, 「新型うつ」という名称とそれに関する情報が流され続けることで, 一般の人々は「新型うつ」をすでに確定した医学知識として認識し, 何らかのイメージ, すなわちしろうと理論を有すると考えられる。

「新型うつ」はマスコミが広めた用語であったとしても, 多くの精神科医が指摘してきたように, 決して実体のない現象ではない。薬物療法の効果が限定的とされる「新型うつ」には, 心理・社会的な視点からの予防や介入も重要である。そして, 有効な予防・介入策を考案するためには, 偏見の有無なども含めて一般的な人々の「新型うつ」に対する認識を知るなど, 「新型うつ」に対する心理学的な研究が不可欠で, 本研究はその一端を担うものと考えられる。

「うつ」のしろうと理論

しろうと理論とは, 医師等専門的知識を豊富に持たない一般の人々が, 日常生活での直接的あるいは間接的経験をもとにさまざまな事物について素朴な概念を持つことである (Furnham, 1988)。しろうと理論の内容を検討する際, 形容詞対等既存の評定尺度で評価を求めて測定することも可能である。しかし, 人々がどのようなしろうと理論を共有しているのか不確かな場合に既存の評定尺度のみで検討すると, 尺度には含まれなかった事柄を把握しきれない可能性がある。そこで, 本研究では, 調査参加者に「新型うつ」について自由に記述してもらい, その記述内容を客観的に調べた。それにより, 「新型うつ」のしろうと理論の内容に, より直接にアプローチすることが可能となる。

「うつ」のしろうと理論に関する研究としては, 「うつ」全般について検討した勝谷・岡・坂本・朝川・山本 (2011), 原因について検討した Kuyken, Brewin, Power, & Furnham (1992), 治療について検討した Kirk, Brody, Solomon, & Haaga (1999) 等があるが, ここで調べられている「うつ」は「新型うつ」ではない。「新型うつ」に相当する事例は, 日本以外でも存在するという指摘もあり (Kato et al., 2011), 決してマスコミが作りだした虚像ではない。こうした現状をふま

え, 本研究では, 従来型抑うつと異なる特徴を持つとされる「新型うつ」について, どのような認識が一般に共有されているか学生を対象に検討し, 「うつ」のしろうと理論を検討した勝谷他 (2011) との違いを考察する。

目 的

本研究では, 大学生を対象に調査を行い, 「新型うつ (病)」についてどのような認識があるか自由記述の内容から検討した。具体的には, 勝谷他 (2011) に準拠し, 「新型うつ」の人々, 「新型うつ」の原因・理由について記述を求め, その内容の特徴を調べた。さらに, 「新型うつ」を知った情報源も検討し, どのような情報源から「新型うつ」を知ったか, 情報源によって知った内容がどう異なるのかを検討した。

さらに, 本研究では, 抑うつのしろうと理論を検討した勝谷他 (2011) をふまえ, 「新型うつ」全般, 「新型うつ」の人々, 「新型うつ」の原因についてのしろうと理論を調べ, 両者の違いを検討する。

方 法

調査参加者

首都圏の大学に在学する大学生 225 名 (男性 109 名, 女性 109 名, 不明 7 名; 平均年齢 19.99 ± 1.11 歳) が質問紙に回答した。調査参加者の主な専攻は, 社会科学, 心理学, 国文学, 社会学, 英文学などであり, 医学専攻の学生はいなかった。

分析対象者

調査参加者のうち, 「新型うつ (病)」という言葉を用いた調査参加前から知っていたと回答したのは 106 名 (47.11%) だった。以降の分析では, この 106 名のデータを分析対象とした。「新型うつ」の言葉を知らずに回答している場合, 当て推量や単語のイメージだけでもとづく回答の可能性が高く, 研究目的に合った分析ができないためである。

調査手続き

「新型うつ」のしろうと理論の内容を調べるため, 勝谷他 (2011) の手続きを参考に, 同様の調査手続きでデータを収集した。具体的には, 文章完成法で「新型うつの人 (びと)」, 「新型うつの原因・理由」という言葉を主語とした文章について簡潔な言葉で完成するように求めた (それぞれ制限時間 2 分間, 最大 20 文まで)⁵。調査は, 2012 年と 2015 年にそれぞれ別の大学

⁵ 調査票では「新型うつ (病)」を主語とした文章完成も求めたが, 紙幅の関係で割愛する。

Table 1
自由記述にみられた頻出語

新型うつの人（びと）		新型うつの原因・理由	
出現語	出現数	出現語	出現数
人	56	ストレス	31
多い	35	自分	27
自分	23	人	26
ない	19	環境	24
ストレス	18	周り	23
仕事、思う、鬱	各 16	人間関係	19
できる	12	仕事	18
やる気、若い、弱い	各 11	できる	16
真面目、社会	各 10	社会	14
暗い	9	ない	12

注）出現頻度上位の語のみ記載している。

で異なる専攻の学生を対象に実施した^{6,7)}。

次に、「新型うつ（病）」という言葉を調査参加前から知っていたかを尋ね、「はい」と回答した場合に情報源を尋ねた。具体的には、新型うつ（病）についてどのようなところからどのような情報を知り得たかを尋ねた。「何で・どのようなところから」、「何を・どのようなことを」と書かれた表形式の記入欄に自由記述で回答を求めた。

最後に、年齢、性別、学部と学科を尋ねた（その他、うつに対する認識等を尋ねたが、今回の分析には使用しないので割愛する）。

分析方法

記述内容の分析にはテキストマイニングの手法を用いた。テキストマイニングを用いる意義として、テキストデータを計量的かつ客観的に検討できることがあげられる。調査票の自由記述のようなテキストデータが大量にある場合、人手による記述内容の分類だけでは、見落としや主観による偏りが問題になる。テキストマイニングを用いることで、主観的要素をできるか

ぎり排除してテキストデータのような質的データを検討できる（樋口, 2014）。つまり、「新型うつ」の記述内容をテキストマイニングで計量的に調べることによって、「新型うつ」とはどのようなものと一般に考えられているのかを客観的に明らかにできる。

よって、本研究では、自由記述で得られたテキストデータについて、テキストマイニングソフトウェアのKH Coder（樋口, 2004）を用いて分析した。分析の際、手書きによる誤字・脱字を修正し、判読できない記述、記述途中の文、記号、頻度が多いが一般的でそれ自体特に意味を持たない語（例：「する」、「ある」）を分析からはずした。また、「うつ」、「鬱」のように意味が同じで異なる表記の語を1つに統一して分析に用いた。

結 果

「新型うつの人（びと）」の記述の検討

「新型うつの人（びと）」の平均記述数は4.54（SD = 2.74）だった。記述に出現した語（Table 1, 左列）をみると、「人」、「自分」等人物を表す語、「ストレス」、「仕事」等、原因に関わる語、「やる気」、「若い」、「弱い」、「真面目」、「暗い」等「新型うつ」を持つ当事者の特徴を示す語が出現数の上位にあがった。

まず、最頻出の名詞である「人」について、どのような人に関する記述があるかを調べるため、「人」と共起している形容詞・形容動詞を検討した。「人」と比較的共起していた形容詞・形容動詞は、「多い」、「若い」、「真面目」、「弱い」、「苦手」等であった。具体的な記述をみると、「真面目な人が多い」、「若い人が多い」、「ストレスに弱い人である」等の記述がみられた。

⁶ 2つの大学は、調査時期、専攻等いくつかの要因が異なるため、回答に大きな違いがないか確認した。具体的には、「新型うつ」に対する出現語上位10語について、2つの大学で出現度数に差があるかクロス集計に対して検定した。その結果、「自分」はカイ二乗値が有意だったが（ $\chi^2(1) = 6.35, p < .05$ ）、その他の語は有意ではなかった。本論文の主張、結論に直接関係する語では有意差がみられなかったため、2つの大学データをまとめて分析した。なお、心理学科の学生と心理学科以外の専攻の学生でも同様の検定をしたが、「自分」はカイ二乗値が有意だったが（ $\chi^2(1) = 12.66, p < .05$ ）、その他の語は有意ではなかった。

⁷ 紙幅の関係上、本論文で詳細なデータを示せなかった。ご希望の方は第1著者までご連絡いただきたい。

Table 2
「新型うつの人（びと）」の記述の階層的クラスタ分析

クラスタ名	語
1 性格	責任感, 強い, 他人, 気, 悩み, ストレス, 溜め込む
2 苦手	苦手, 弱い, コミュニケーション, 暗い
3 休む	学校, 仕事, イメージ, 会社, 休む
4 普通	生活, 普通, やる, たがる, 自分, 鬱
5 上司	上司, 怒る
6 症状	やる気, ない, 気分, 落ち込む, 行く, ない, 見る, 辛い, 鬱病, 周り, あまり, 若い, 人, 持つ, 症状, 出る
7 甘え	一人, 心, 甘え, 働く, 好き, できる, 嫌, 言う
8 脆弱性	感じる, やすい, 真面目, 良い, 悪い, ゆとり, 元気, そう, 社会, 若者, 多い, やすい, 思う, 悩む

注) 表記が同じ語があるが、それぞれ品詞が異なる。

Table 3
「新型うつの原因・理由」の記述の階層的クラスタ分析

クラスタ名	語
1 関係	影響, 生活, ない, 現実, 違う, 上司, 関係
2 環境	変化, 環境, 対人関係, 学校, 職場, 会社, つらい, 人間, ネガティブ, 上手い, いく, 仕事, ない
3 弱さ	メンタル, 弱い
4 疲労	プレッシャー, 疲労, 悪化, 感じる
5 発散	周囲, 発散, できる
6 自分の問題	分かる, 過度, 思う, 問題, 自分, 心
7 ストレス	多い, 社会, 理解, ストレス, 疲れ, 嫌, 人間関係, いじめ, 鬱, 気付く, 本人, 相談, 悪い, うつ病, 知る, 性格, 周り, 人

注) 表記が同じ語が含まれているが、それぞれ品詞が異なる。

また、「人」が含まれる記述で最も多かったのが性格に関する記述で、次に行動の特徴に関する記述、若い人に多いことの記述だった。性格に関する記述で最も多かったのが「真面目」で、その他「責任感が強い」、「プライドが高い」、「暗い」、「活発」、「神経質」、「悩みやすい」、「陽気」等の記述がみられた。なお、「真面目でない」という記述はみられなかった。

次に、「自分」に関する記述では、「自分に甘い」、「自分の好きなことならできる」等、マスメディアで報じられることが多い「新型うつ」の特徴に含まれる記述があった。そのうち、「自分がうつであるか分かっていない」という、病識のなさに関する記述が最も多くみられた。

最後に、記述の全体的傾向を探るため、出現数が比較的多い語を用いて階層的クラスタ分析を行った。まとめやすさ、解釈のしやすさから距離の推定法はユークリッド距離、クラスタ化の方法はWard法を用いた。

最小出現数4までの62語を用いて分析したところ、8つのクラスタに分かれた。まず、「苦手」、「コミュニケーション」、「弱い」等のクラスタ2(苦手)、「学校」、「仕事」、「休む」等のクラスタ3(休む)、「甘え」、「働

く」、「好き」、「できる」等のクラスタ7(甘え)のように行動の特徴を示すクラスタ、「責任感」、「強い」、「悩み」、「ストレス」、「溜め込む」等のクラスタ1(性格)、「やる気」、「ない」、「気分」、「落ち込む」等の症状に関するクラスタ6(症状)、「社会」、「若者」、「多い」、「ゆとり」等、「新型うつ」になりやすい人の特徴に関わるクラスタ8(脆弱性)がみられた(Table 2)。

「新型うつの原因・理由」の記述の検討

「新型うつの原因・理由」の平均記述数は、4.35 ($SD = 2.64$) だった。記述に出現した語(Table 1, 右列)をみると、「自分」、「人」等の人物を示す語の他、「ストレス」、「環境」、「人間関係」、「仕事」、「社会」等、背景要因に関わる語が出現数の上位にあがった。

次に、最頻出の単語である「ストレス」について、具体的な記述内容を調べた。その結果、「ストレス」、「ストレスである」等、ストレスであることのみあげている回答が最も多かった。「ストレス」を含む文で「ストレス」と共起している語を調べた結果、「発散」、「できる」、「ない」、「人間関係」、「対人関係」、「周り」、「環境」といった語が比較的多く共起していた。具体的には、ストレスの蓄積、ストレス発散ができないこと、

Table 4
テレビで知った「新型うつ」の内容

カテゴリ	記述の具体例	度数
症状	特定の場所や状況でだけうつ病のような症状が出る。	16
特徴	周りの人から気づかれにくく、なまけ者だと勘違いされることがある。ふだんは普通に見える。	11
名前	名前を聞いたことがある程度。	10
若い人に多い	若い世代に増加傾向がある。	8
増加傾向	最近増えている。	8
従来型との違い	新型うつとうつ病の違い。	6

注) 度数が5以上のみ記載。複数回答のため、度数は延べ数である。

Table 5
インターネットで知った「新型うつ」の内容

カテゴリ	記述の具体例	度数
症状	仕事中は憂うつで普段は普通の精神状態。 会社に何となく行きたなくなっていて心療内科で新型うつという病名をもらって休む。	11
特徴	新型うつは周囲の人がうつであることに気づくのが難しい。 従来のうつ病と違って、甘えなのではないかということ。	6
従来型との違い	うつ病とは微妙に症状が違う。 うつと新型うつの違い。	6

注) 度数が5以上のみ記載。複数回答のため、度数は延べ数である。

学校や職場、家庭におけるストレス、精神的ストレス等の記述がみられた。

また、次に出現数の多い「自分」については、「自分を追いこんでしまう」、「自分を自分で責めてしまうことだ」等、自責に関する記述が最も多く、次いで自分の問題であることの記述がみられた。

最後に、記述の全体的な傾向を探るため、出現数が比較的多い語を用いて階層的クラスタ分析を行った。最小出現数4までの53語を用いて分析した。クラスタ化の方法と距離の推定法は先の分析と同じである(Table 3)。

その結果、「ストレス」、「人間関係」、「いじめ」等のクラスタ7(ストレス)や「対人関係」、「職場」、「学校」、「つらい」等のクラスタ2(環境)のように社会的環境によるストレスのクラスタ、「プレッシャー」、「疲労」等のクラスタ4(疲労)や「メンタル」、「弱い」等のクラスタ3(弱さ)のように当事者の内的要因に関するクラスタ、「周囲」、「発散」等ストレスを発散できないことに関するクラスタ5(発散)等がみられた。

「新型うつ」の情報源の検討

「新型うつ」について、どのような情報源からどのような情報を知ったのか、「新型うつ」の情報源と知った内容を検討した。情報源として多くあげられたのは、順にテレビ(58名)、インターネット(20名)、ニュー

ス(10名)、教育機関(9名)、人づて(8名)、新聞(6名)、自分の経験(5名)等であった(頻度5以上。複数回答のため、同一の調査参加者が各情報源をあげている場合がある)。

最も多く情報源としてあげられた「テレビ」では、知った内容として「新型うつ」の症状、特徴、名前等があがった。最も多いカテゴリである症状については、「仕事はできないけど趣味はできる」といった気分の変動の大きさが多く言及された(Table 4)。次に情報源としてあがった「インターネット」では、症状、特徴、従来型との違い、意見等があがった(Table 5)。

考 察

本研究では、「新型うつ」に対する学生のしろうと理論を文章完成法でテキストデータを収集して検討した。

精神医学を専門としない大学生を対象に検討した結果、「新型うつ(病)」という語を知っていた調査参加者は47.11%だった。以下、勝谷他(2011)が明らかにしたうつのしろうと理論と比較して「新型うつ」のしろうと理論の特徴を検討していく。

うつのしろうと理論との比較

まず、「新型うつの人々」についての記述内容を検討したところ、若年層に多いこと、病識のなさ、やる気のなさ等の行動の特徴、性格に関する記述が比較的

多くみられた。従来型抑うつとは異なり、「新型うつ」が若年層に多くみられ、病識がなく、「新型うつ」発生の背景に甘えがあるという認識が一般の人々の間でみられることを示唆する結果である。性格については、「真面目」や「責任感が強い」等従来型抑うつと関連の深い病前性格に関する記述が多いことが特徴的な傾向として現れた。

さらに、「新型うつ」の原因・理由については、頻出語の分析や階層的クラスタ分析の結果から、ストレスに関する問題や社会的環境の変化や悪化があげられていることが示された。原因においても概ね従来型抑うつと関連の深い事柄があげられた。勝谷他（2011）において、「うつ」の原因としてあげられたのがストレスや責任感の強さだった。一方、本研究では、ストレスだけでなく心の弱さや他責傾向があげられている点が勝谷他（2011）の結果と異なる点であった。また、本知見では治療に関する記述（〇〇で治る、等）が少なかったことも勝谷他（2011）と異なる点と言える。

「新型うつ」の情報源

「新型うつ」の情報源について回答を求めたところ、テレビが情報源として最も多くあがった。テレビは信頼できるメディアとして一般に認識されているが（田中・山本，2012），健康情報娯楽番組に情報の誤りや誤解などが多々紛れ込んでいるという指摘がある（高橋，2006）。次いで、インターネットが情報源として多くあげられた。インターネットからの医療情報は、正しい情報だけでなく、信頼性が十分でない情報が含まれていることも多い（横井・福田，2013）。よって、学生に対しては特にテレビやインターネットで知り得た精神疾患に関する情報を十分吟味して活用することの重要性を伝える必要がある。

本研究の限界と結論

本研究の限界は次の2点である。まず、本研究で調査に回答した大学生は、文系学部で心理学や文学などを専攻する学生と文理融合系学部で社会科学や人文科学等さまざまな学問を学ぶ学生が含まれており、学生の専攻が調査結果に関与していた可能性がある。次に、今回の調査で得られた回答内容を見ると、メディアで紹介されている「新型うつ」にみられる特徴の他、「真面目な人になる」、「几帳面」等従来型抑うつの特徴も記述されていた。したがって、「新型うつ」を従来型抑うつと混同した調査参加者がいた可能性も否定できない。

本研究では、「新型うつ」のしろうと理論を調べた。その結果、従来型抑うつとは異なり、「新型うつ」は若年層に多くみられ、発生の背景に甘えがあり、原因として心の弱さや他責傾向がある、という認識が人々の間にあることが示唆された。「新型うつ」に限らず、

疾患に対するしろうと理論が、その疾患に対する否定的あるいは肯定的な態度を形成し、その態度が、自身がその疾患に罹患した際の援助要請行動に影響したり、その疾患に罹患した人への援助行動に影響したりする可能性が考えられる。甘え、心の弱さ、他責傾向が「新型うつ」の特徴としてとらえられているとしたら、おそらく一般的な人は、几帳面、配慮的、努力家といった病前性格が指摘されている従来型抑うつと比べることで、「新型うつ」に対してより否定的な印象を持つと推測される。疾患に対して人々の持つ否定的な態度は、自身の援助要請行動や他者からの援助に負の影響を与えると考えられるため、「新型うつ」の罹患者は、従来型抑うつの方よりも社会的に不利な状態に置かれていると考えられる。今後は、「新型うつ」のしろうと理論が「新型うつ」の患者への態度や行動にどのように影響するかを検討することが必要である。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). Washington, D.C.: American psychiatric Association.
- (アメリカ精神医学会 高橋 三郎・大野 裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Furnham, A. (1988). *Lay theories: Everyday understanding of problems in the social sciences*. New York: Pergamon Press.
- 樋口 耕一 (2004). テキスト型データの計量的分析——2つのアプローチの峻別と統合—— 理論と方法, 19, 101-115.
- 樋口 耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析 ナカニシヤ出版
- Kato, T. A., Shinfuku, N., Fujisawa, D., Tateno, M., Ishida, T., Akiyama, T., ... Kanba, S. (2011). Introducing the concept of modern depression in Japan; An international case vignette survey. *Journal of Affective Disorders*, 135, 66-76.
- 勝谷 紀子・岡 隆・坂本 真士・朝川 明男・山本 真菜 (2011). 日本の大学生におけるうつのしろうと理論——テキストマイニングによる形態素分析とKJ法による内容分析—— 社会言語科学, 13, 107-115.
- 勝谷 紀子・坂本 真士 (2015). マスメディアにおける「新型うつ」——記事データベースによる検討—— 日本社会心理学会第56回大会発表論文集, 221.
- Kirk, L., Brody, C., Solomon, A., & Haaga, D. A. F. (1999). Lay theories concerning causes and treatment of depression. *Journal of Rational-Emotive & Cognitive-Behavior Therapy*, 17, 237-248.
- Kuyken, W., Brewin, C. R., Power, M. J., & Furnham, A. (1992). Causal beliefs about depression in depressed

- patients, clinical psychologists and lay persons. *British Journal of Medical Psychology*, 65, 257-268.
- 日本うつ病学会 (2012). うつ病 Q&A Q4. 新型うつ病が増えていると聞きます。新型うつ病とはどのようなもののでしょうか? 日本うつ病学会 Retrieved from <http://www.secretariat.ne.jp/jsmd/qa/pdf/qa4.pdf> (2016 年 5 月 6 日)
- 坂本 真士・村中 昌紀・山川 樹 (2014). 臨床社会心理学における「自己」——「新型うつ」への考察を通して—— 心理学評論, 57, 405-429.
- 島沢 優子 (2012). 社会 職場でも家庭でも学校でも大流行 新型うつが日本を蝕む AERA 6 月 25 日, 10-13.
- 高橋 久仁子 (2006). テレビの健康情報娯楽番組における食情報の問題点 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 41, 191-204.
- 田中 克己・山本 祐輔 (2012). 情報メディアとその信憑性 映像情報メディア学会誌, 66, 891-895.
- 横井 遥・福田 里砂 (2013). インターネット上の医療情報の信頼性の検討——開腹手術に伴う術後疼痛に関する情報について—— 医療情報学, 33, 49-59.
- 2017. 8. 10 受稿, 2018. 3. 18 受理 ——